

文京区版ネウボラ事業における親子の包括的支援

文京保健所 保健サービスセンター

木内 恵美

■文京区の概要

文京区の人口は約 21 万人で、ここ数年は子育て世代の転入により増加傾向にある。18 歳未満人口の割合は 14.1%、高齢化率は 19.7%（2018 年 1 月 1 日）である。区内には 4 か所の大学病院のほか、東京都指定の二次救急医療機関が 3 か所あり、医療に恵まれた地域である。

■文京区版ネウボラ事業導入の背景

晩婚化に伴い、国全体の報告と同様、本区でも出産年齢の高齢化がみられ、平成 26 年以降、初産婦の 3 人に 1 人以上が高齢初産となっている。高齢初産の問題としては、産後の体力が回復しにくいことに加え、祖父母世代も高齢で十分な支援が得にくいこと、父親は社会的責任が重い世代となり、家庭で母親を支える時間を十分に確保しにくいことなどがある。さらに核家族の増加で、身近な子育て経験者がなく、「気軽に育児の相談ができる人がいない」との声がよく聞かれた。

こうした背景から母子保健をベースとした包括的な支援体制強化を目指し、2015 年 4 月より子育て世代包括支援センター(母子保健型)を保健サービスセンターが担うこととした。

■文京区版ネウボラ事業の概要と実績

従来、本区の保健師活動は地区担当制をベースとしており、母子保健活動や精神保健活動、健康づくり、難病患者療養支援など、各分野を切り口に地区担当保健師が住民の生活に寄り添いながら支援を行ってきた。「文京区版ネウボラ事業」では、この従来の保健活動を基盤としながら、さらに妊娠期からのかかわりの強化と出産後のサポートをより充実させた。

【母子保健コーディネーターの配置】

保健サービスセンター（本郷支所を含む）の地区担当保健師 20 名を「母子保健コーディネーター」として配置し、妊娠期から出産、子育て期にわたる健康や育児に関する相談の対応や、ニーズを踏まえた母子保健・子育て支援サービス等の情報提供と支援を行っている。

【ネウボラ相談（産前・産後サポート事業）】

いままで保健師が受けていた産前・産後の健康や子育ての相談に「ネウボラ相談」と新たな名称をつけ、さらに東京都助産師会館が運営する八千代助産院を相談拠点として加えた。助産院では、区役所が閉庁している年末年始を含む土日・祝日も、助産師が相談に応じている。

【「サタデーパパママタイム」（産前・産後サポート事業）】

「父親にも育児について専門職からの助言が得られる場がほしい」等の声があり、0～3 か月の乳児を育てる親同士の交流事業を始めた。父親が参加しやすいよう、土曜日に地域の子育て広場等で開催している。

【宿泊型ショートステイ事業（産後ケア事業）】

産後の健康面の悩みや育児への不安を抱える産婦に対し、助産院での宿泊による母体ケア、乳児ケア、育児等の支援を行っている。行政が窓口となることで、サポートが不足している家庭や、産婦に基礎疾患があるなど、より支援を要する家庭に活用してもらうことができる。

【ネウボラ面接（妊婦全数面接）】

平成 27 年度より、東京都が行う「出産・子育て応援事業」を活用し、妊婦全数面接の実施を目指している。妊娠期から行政の専門職が関わることで、出産・子育てに関する妊婦のさまざまな不安を軽減し、各家庭のニーズに応じた支援を切れ目なく行うための入り口とした。

■まとめ

本事業の開始により、要支援者を把握できる機会が増え、複数の機関が一つのチームとして連携し、早期に介入することができるようになった。今後は、妊産婦・子育て家庭を地域で支えるためのネットワークの更なる強化と、保健師・助産師の人材育成を行うとともに、子どもとの基本的な関わり方がわからず悩む多くの親と子どもの育ちを支える、普遍的な予防の取り組みを進めていきたいと考えている。